

20. 日本の伝統に根差した思想

- 西田幾多郎[1870-1945]日本の代表的哲学者。東京帝大に学び、京都帝大で教鞭をとる。(哲学の道は、彼の散歩コース) 禅の修行を通じて自己を鍛錬し、**純粹経験**や**絶対無**などの概念を提唱した
[著書]『善の研究』(日本初の独創的哲学書。純粹経験と言う概念を提出し、それを基礎に自己の確立という課題を追究)『自覚における直観と反省』『無の自覚的限定』
- ・**純粹経験**…西田が自分の哲学の根本としたもの。**主客未分**(主観と客観がまだわかれていない)状態の具体的・直観的な経験をさす。Ex.) 美しい音楽に聞き入る・読書に没頭する……
 - ・**西田哲学**…西田が自らの思索および体験に基づいて形成した哲学。日本初の独創的哲学ともいえる。明治以降、日本の哲学は西洋哲学の移入ばかりとなっていたが、西田哲学は、東洋および日本思想を根本としつつ、西洋哲学の肉付けをしていった点で独創的であるといえる
 - ・**場所の論理**…西田の晩年の哲学用語。現実はどうのようなものであるかを考えた西田は、東洋と西洋の対立の底に、単なる有無をこえた**絶対無の「場所」**があるとした
 - ・**絶対無**…一切のものを存在させる**絶対的な無**。有の否定としての**相対的な無**ではなく、**相対有・無の対立**を越え、かつ**相対的な有・無の根拠**となる**絶対的なもの**を意味する。
Ex.) こたつの上にみかんがある・ない⇒**相対無**

- 和辻哲郎[1889-1960]日本の代表的な倫理学者。京大・東大教授。西田の影響を受け、倫理学の研究をすすめる。日本の文化や風土・精神性にも興味を持ち、幅広い学問活動を行った
[著書]『風土』(cf.#1)『人間の学としての倫理学』(倫理学を人と人との間柄の学問 (=人間の学) として捉える。和辻の倫理学体系の出発点)『倫理学』
- ・**間柄的存在**…和辻の捉えた人間の在り方を指す言葉。人間は人と人との間柄(関係)の中でのみ人間でいられるのであり、孤立した個人的存在ではないということ。このような間柄で実現される理法こそが倫理学であると和辻は説いた

- 柳田国男[1875-1962]日本民俗学の創始者。東京帝大卒業後、農民生活に関心を持ち、特に無名の常民の生活文化に注目しながら、民俗学の研究を進めた。また、民俗学を日本人の精神を解明する学問として**新国学**とも呼んだ。 [著書]『遠野物語』(現在の岩手県遠野地方に伝わる山の神や河童などの民間伝承を記した)
- ・**民俗学**…民間伝承・民間信仰・生活文化・方言などをそだいとして民族の伝統文化を研究する学問
 - ・**常民**…柳田の造語。民間伝承を保持している階層で、無名の人々のこと

- みなかたまくす
□**南方熊楠**[1867-1941]明治-昭和にかけての在野の生物学・民俗学者。明治政府の**神社社会祀令**に対しては、鎮守の森が破壊され、人の心や文化をも破壊されるとしてつよく反対した

- むねよし
□**柳宗悦**[1889-1961]大正・昭和期の民芸運動創始者。朝鮮を旅行した際に美術を通じて朝鮮への理解を深め、1919年の三・一独立運動の際には、日本の朝鮮政策を批判した
- ・**民芸**…柳の造語。日用品への美の概念。従来普段使いの日用品としてしか扱われなかったものに、無名の職人による熟練した手仕事によって生み出された美を発見した。

センター問題に挑戦! No.20 (2004年追試) [易]

柳田民俗学に関する説明として**適当でないもの**を、次の①~④のうちから一つ選べ。

- ① 日本古来の民族の姿を、文学的直観をもとに論じ、共同体外部からの来訪神(まれびと)の性格を明らかにしようとした。
- ② 日本文化の原風景として、稲作定住農耕民の生活習慣を想定し、その由来を宗教的側面を踏まえて明らかにしようとした。
- ③ 知識人の書き残した文献にではなく、無名の庶民の日常的習慣や儀礼の中に日本文化の真の姿を探求しようとした。
- ④ 日本全国の民間伝承を筆録する運動をすすめ、怪異譚や民話を分析して、庶民の精神生活の実相を明らかにしようとした。

[No.19の答 ④] ①×旧来の道徳に真に従う ②×新たな生活や社会制度のあり方 ③×現実をありのままに直視⇒自然主義]